

キーワード（パターン）

キーワード (パターン)	空間スケール			基本原則				
	都市	地域	敷地	地勢	化歴 の文・文 脈	発市 の街地開 文脈	空界 気限 の	暮らし
生駒山への意識	○	○		○				
緑に溶け込む建物	○	○		○		○		
緑の島と屋根並み	○	○		○		○		
見晴らし	○			○		○		
見通しの眺め	○	○		○				
ミチにあわせた境界		○	○		○	○	○	
印象づける顔の空間		○				○	○	
人の尺度		○	○		○			○
人が交わる場所		○	○		○		○	○
聖なる場の威厳		○			○			○
移ろいの演出		○	○					○

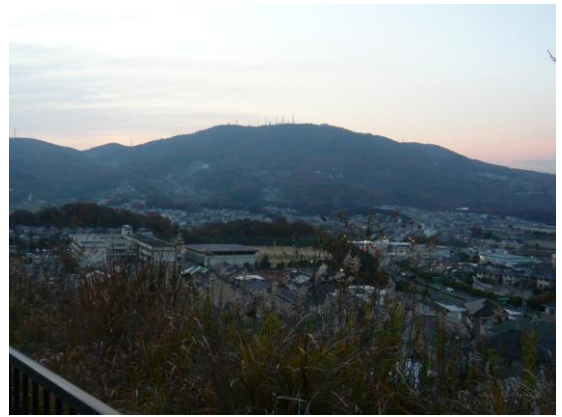
生駒山への意識

生駒山は、生駒のシンボルでありランドマークとして常に人々に意識される存在です。とりわけ竜田川流域（生駒谷）では、あらゆる場所からその雄大な山容を望むことができます。また、古来より往馬大社や宝山寺をはじめとする社寺において神体山として遥拝の対象となり、人々の精神性にも影響を与える強い求心力を持ってきました。

現代の暮らしにおいても、神体山としてだけでなく、そびえる山頂を仰ぎ見たり、生駒山の方が暮らしの中でも強く意識されていたりなど、その求心力は形を変えながら引き継がれています。生駒の人々は生駒山が見えると安心します。生駒山はアイデンティティなのです。



高山方面から 見えなくても方向は意識される



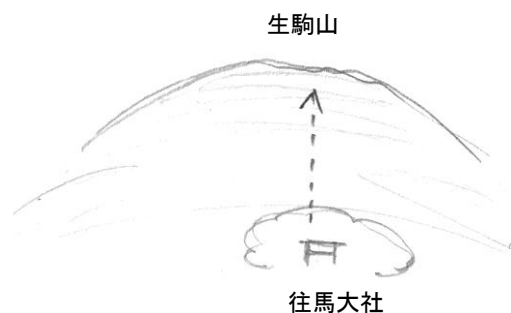
矢田丘陵の上から望む生駒山



生駒山の求心性



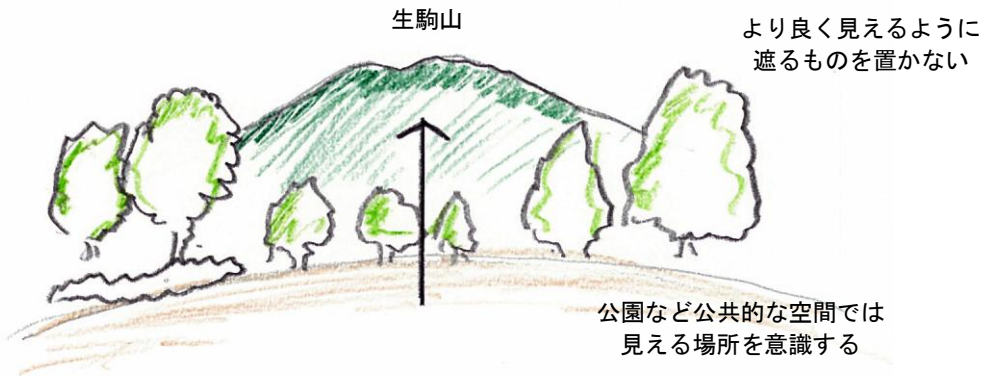
暮らしの背景に生駒山がある



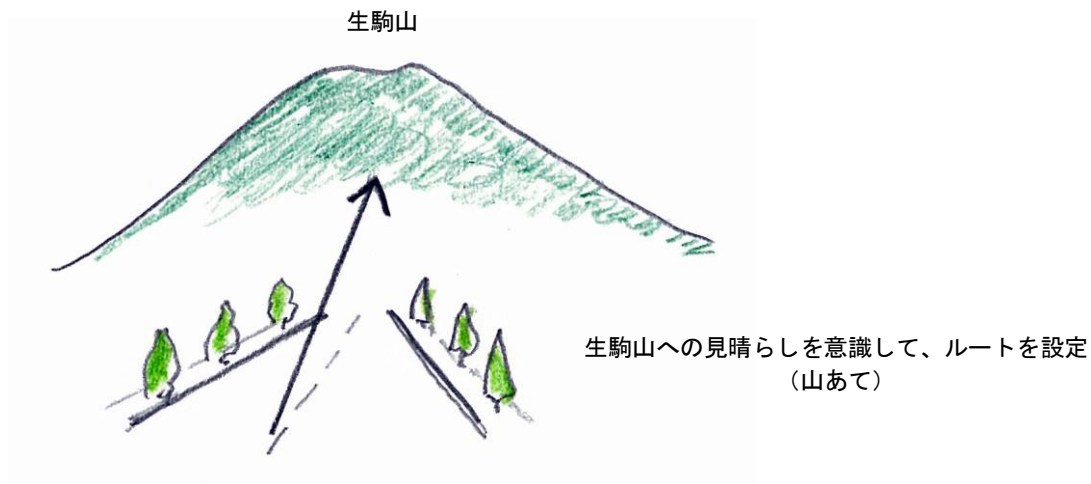
往馬大社は生駒山への信仰を背景として創祀され、山頂からちょうど東の方向に位置する

* * *

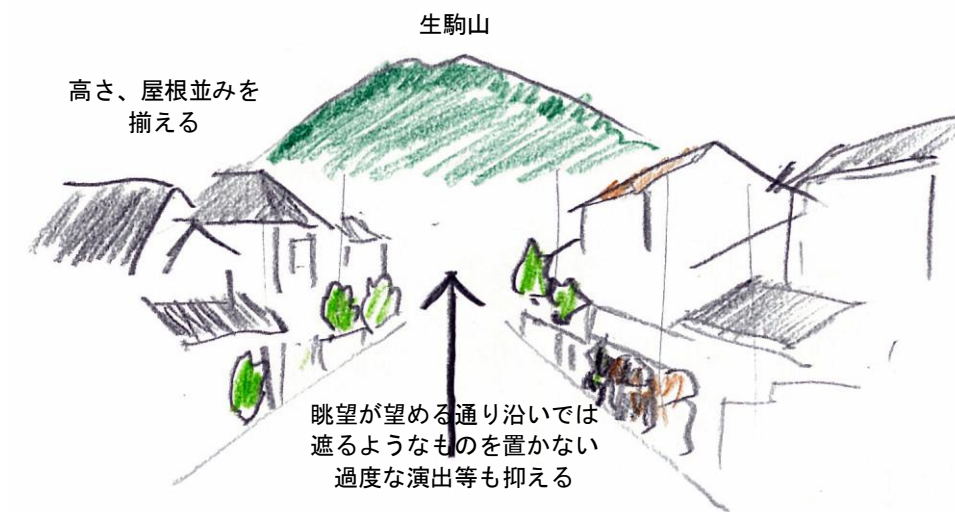
○市街地内に生駒山が見える場所をできるだけたくさん確保すること。



○生駒山の見え方を意識して道路や街区を計画すること。道路の見通し線を生駒山に合わせるだけでなく、生駒山への見晴らしの良いルートや線形にも配慮すること。



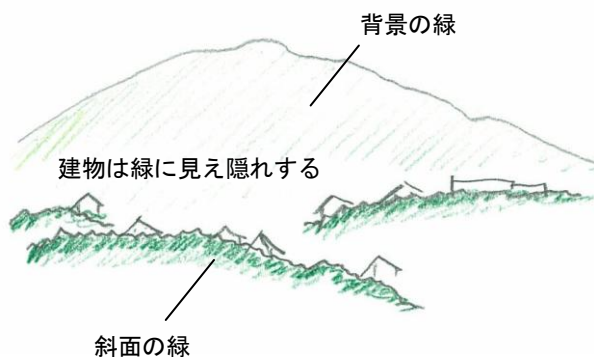
○通りから生駒山が見えるときには、生駒山への眺望をさえぎらないよう建物の高さや配置、敷き際のしつらえなどを工夫すること。



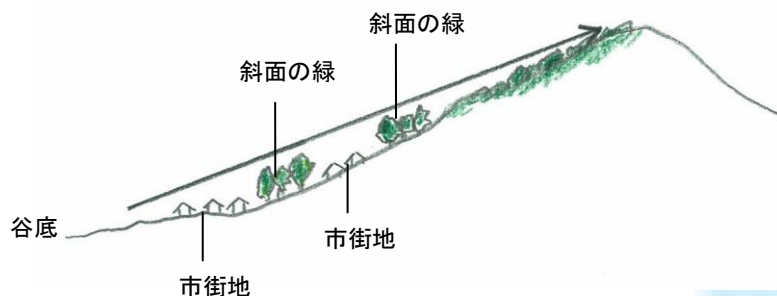
緑に溶け込む建物

生駒の市街地は、竜田川と富雄川の流域を中心とする2つの谷筋の斜面において拡大してきました。このため、谷の底部から見上げると、斜面に残された樹木が緑の帯となって丘上の市街地を覆い隠し、背景の生駒山や矢田丘陵、西の京丘陵とあいまって、あたかも緑の中に市街地が溶け込んでいるように見えます。この眺めは、緑に包まれたまちとして生駒を印象付けています。

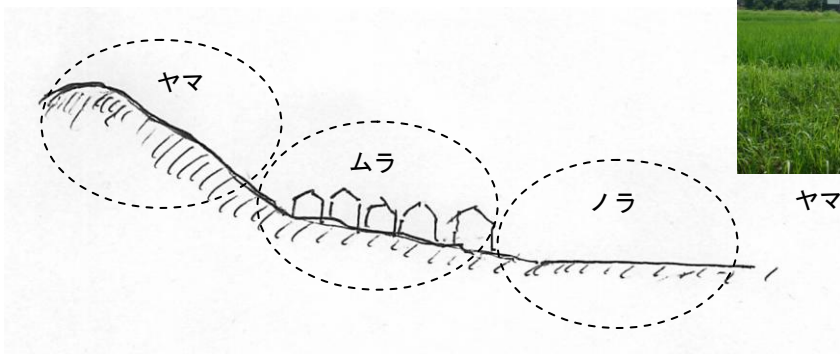
田園地域においても、とりわけ富雄川流域において、ヤマ、ムラ、ノラの三層の土地利用が谷の緩やかな斜面に沿って形成されており、ムラ（集落）が背後の里山に包まれる形で、前面の農地ともあいまって緑の中に溶け込んでいます。



緑の中に溶け込む建物



ヤマ・ムラ・ノラで構成される農の風景



* * *

○谷の底部から見上げた時に見える斜面林が緑の帯となって見えるため、たとえ少量であっても大切に
し、保全すること。開発によって損なわれることのないよう、緑化などによりできる限り復元するこ
と。

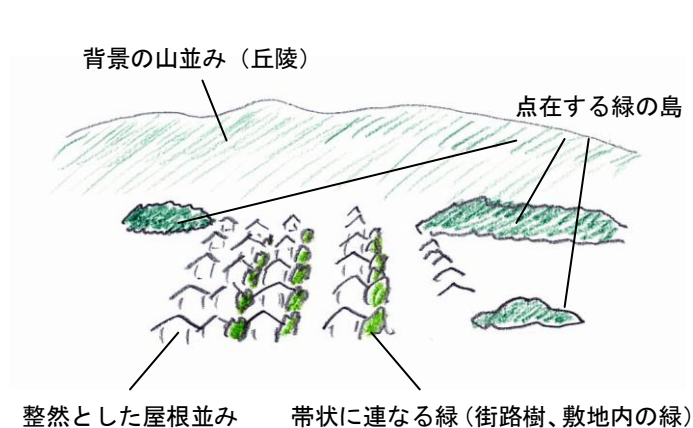
○緑に溶け込むよう、建物の高さや配置を工夫したり、緑との親和性の高い色彩や材料を採用すること。
また規模の大きな建物の周囲には積極的に植栽すること。



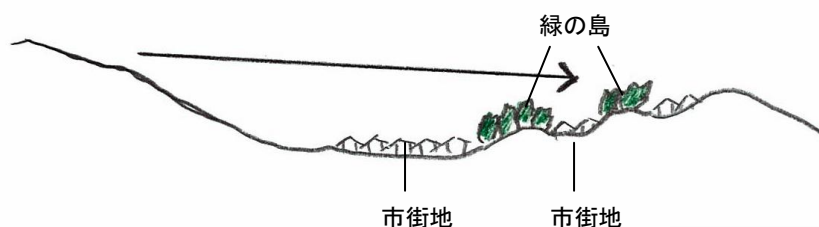
緑の島と屋根並み

生駒は竜田川流域（生駒谷）と富雄川流域の大きく2つの流域から成り立ち、それぞれの河川を中心に山と丘陵に囲まれた谷筋を構成しています。高台から眺めると、建物の屋根越しに谷筋に広がる市街地や集落を俯瞰することができます。

高台から眺望できる景観は、山や丘陵の緑を背景としながら、斜面地に残る緑や集落のモリが緑の島として市街地の海の中に浮き上がるような形で認識され、非常に印象深いものとなっています。こうした緑の島と住宅地の屋根並みが「図」と「地」の関係となり、生駒らしい眺望景観を形づくっているのです。



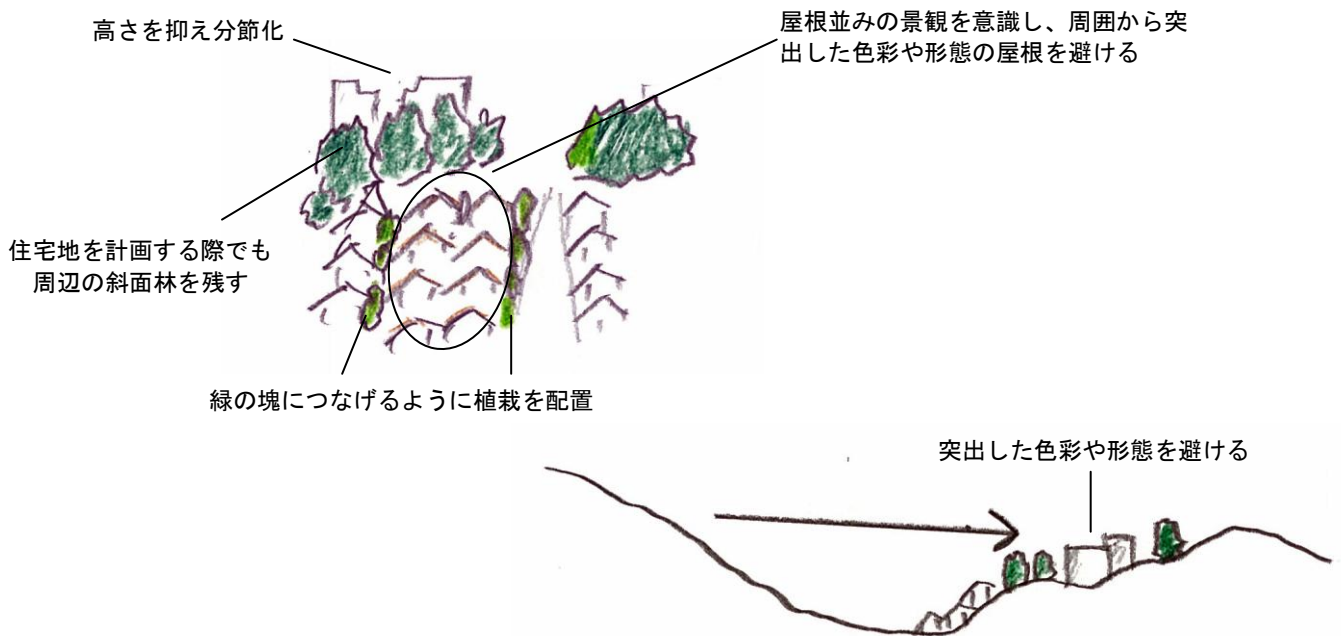
整然とした屋根並みと緑の島



集落に浮かぶ緑の島

* * *

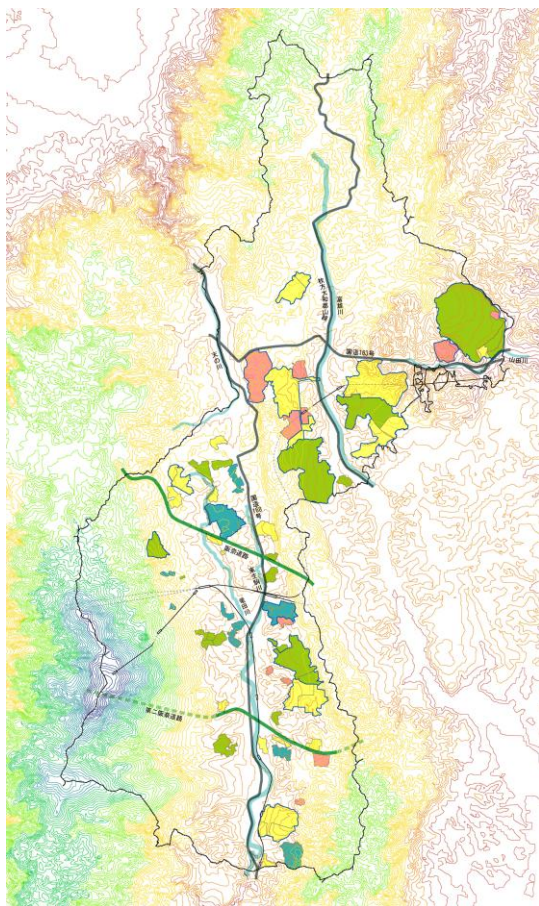
- 高台から緑の島として認識される斜面地の緑や市街地内の緑の塊は、生駒らしい眺望景観の「図」の要素として重要であり、（たとえ少量であっても）大切にし、保全すること。開発などによって損なわれることのないよう、緑化などによりできる限り復元すること。
- 「図」の要素である緑の島の眺めを損ねないよう、緑の周りの建物は配置やボリューム、色彩などの意匠を工夫すること。突出した高さや、長大な壁面は分節化するなど建物の立面積を抑えること。
- 「地」の要素である市街地や集落の屋根並みの景観を損ねないよう、屋根には周囲から突出した色彩や形態を避けること。



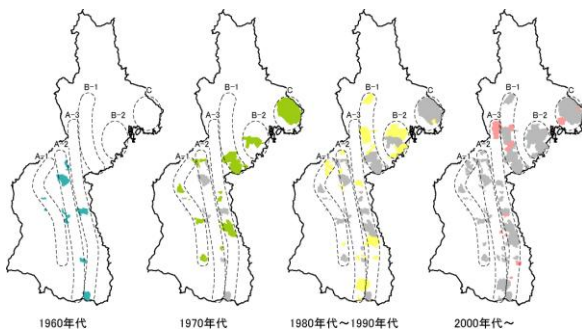
見晴らし

1960年代に生駒谷の谷筋の平地に近い部分から始まった住宅団地の開発は、年代を経るにつれて生駒山麓や矢田丘陵の斜面地などの標高の高いエリアに広がり、視線の先に山が見える通りや眺望の開ける場所などが生み出されてきました。

高低差のある地形の多い生駒では、地形の構造を感じさせる雄大な見晴らしや市街地を俯瞰する清々しい見晴らしに思いがけず出会うことがあります。こうした見晴らしは生駒らしい景観との出会いの機会でもあり、普段の暮らしの中でも景観の印象を高めるものです。また、本来見えるべき眺望が阻害されるのは気分の良いものではありません。



地形に即して標高の高いエリアに広がる住宅地



年代に即して広がる住宅地



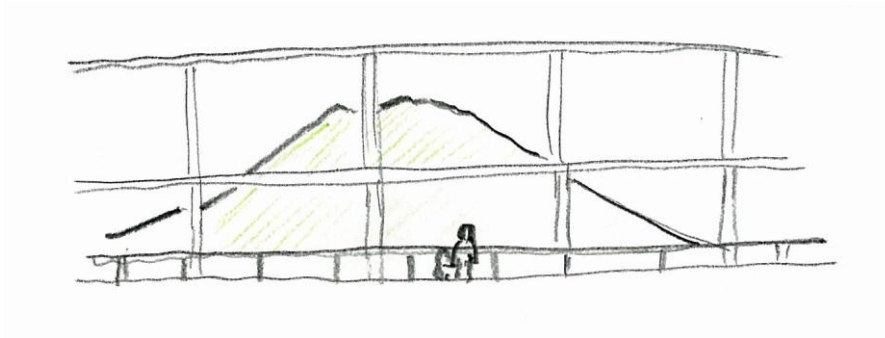
雄大な地形を感じさせる見晴らし



思いがけず見晴らしの良い場所に出会える

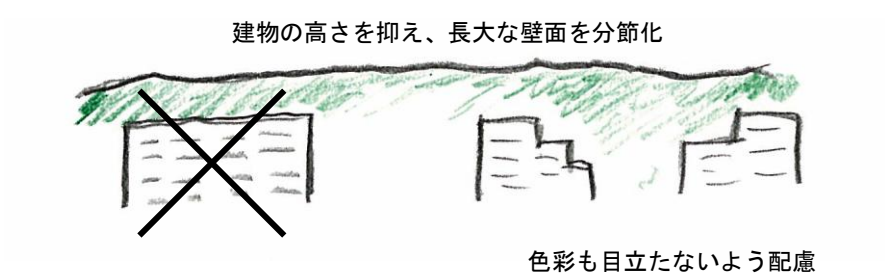
* * *

○多くの人が集まる公共性の高い場所で、生駒山の姿がよく見えるなど眺望が得られる場合には、特定の敷地のみが独占することのないよう場所を開放すること。



眺望点を生み出す
建築においても眺望を楽しむ
場所を作る

○印象的な眺望を阻害することのないよう、建物の高さや配置、色彩などの意匠を工夫すること。視界を遮らないよう、高さや配置を工夫したり、長大な壁面は分節化するなど建物の立面積を抑えたりすること。



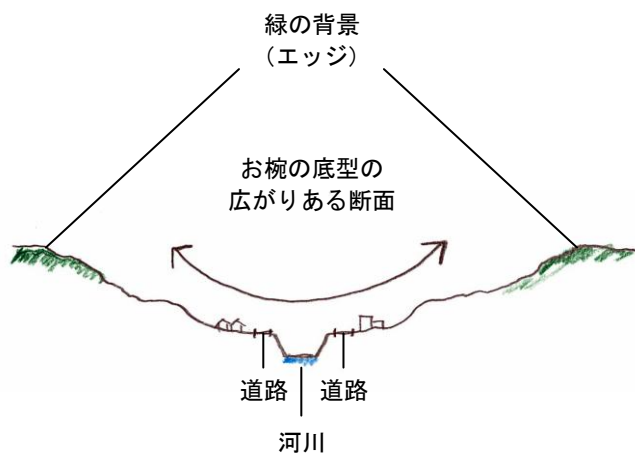
建物の高さを抑え、長大な壁面を分節化

色彩も目立たないよう配慮

川筋の見通し

生駒には竜田川と富雄川が南北方向に流れるとともに、河川に沿って幹線道路が並行していることから、河川と道路が一体となった南北方向に連なる空間と見通しが景観の軸を構成しています。

また、これら2つの谷筋では背後の山や丘陵が平地部に接する部分が緑のエッジとなり、平地部の市街地、農地、河川筋と連続したお椀の底型の断面を構成しています。このため、河川の水面とあわせて緑が連なり、橋の上などから遠くまで広々と見通せる気持ちの良い眺めが得られます。



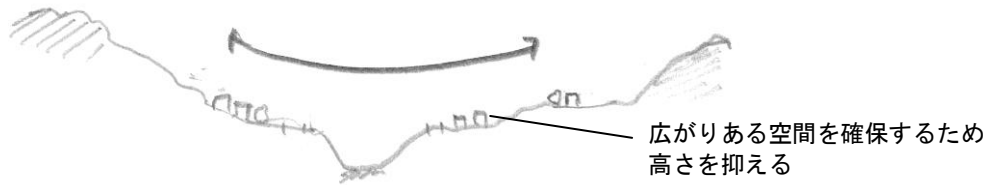
富雄川の谷筋



竜田川の谷筋

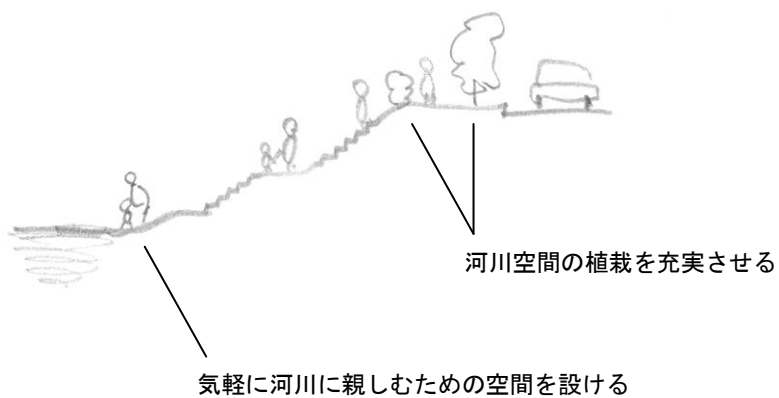
* * *

○お椀の底型の地形を大きく損ねるような計画は避けるとともに、できるだけその空間構成を継承した計画とすること。(谷底で建築物を計画する際は高さを抑える)



○水面と調和した潤いを感じられる眺めを作るため、河川空間の植栽を充実させるとともに、沿川に緑の帯が連なるように植栽を施すこと。

○河川と生活との接点が見えるように、親水空間を設けること。



ミチにあわせた境界

自然の地形に沿って湾曲した集落内の生活道路、ニュータウン内の格子状の直線道路、商店街の賑わいのある通り、広幅員の幹線道路など生駒には様々なミチがあり、それぞれのミチに沿って街並みが形成されています。これらの街並みは、ミチの性格に応じてしつらえられた敷地の境界部によって特徴づけられています。

生き生きとした暮らしを感じさせる街並み、通りとの関係が親密な商店街の街並み、往時の面影を偲ばせる門前町の街並み。これらの生駒らしい街並みはミチとの関係性を意識することで生まれるのです。



集落：目線を防ぎつつ開かれた境界



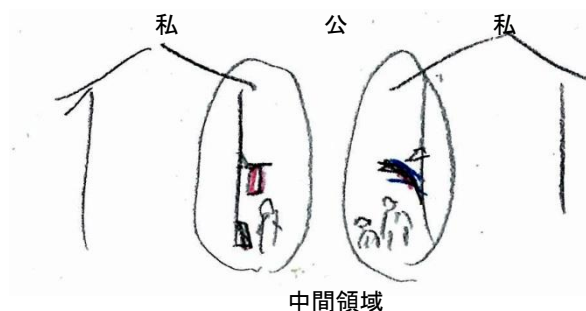
住宅地：風格を感じさせる境界



住宅地：開放感のある境界



商店街：にぎわいのにじみ出し





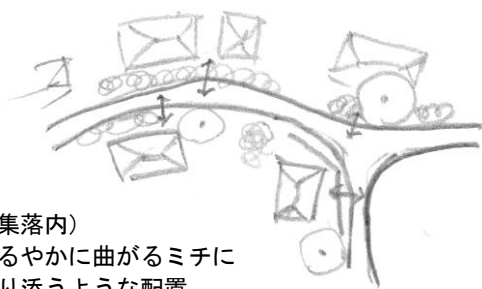
門前町：建物の閉鎖的な壁面が作るまちなみ



* * *

○集落内では塀、植栽などをミチの形状に合わせて配置し、自然に湾曲した通りに沿って小さな変化のある街並みを生み出すよう配慮すること。

○住宅地内ではプライバシーを確保しつつも、生活感をほのかに感じさせるようウチとソトが完全に断絶しないしつらえとし、また緑や花などで通りに潤いや表情を与えるよう配慮すること。



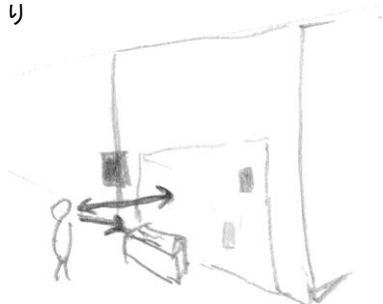
(住宅地内)
緑や花などで潤いを演出



○店舗の敷地際は通りから店内の様子や気配を感じることができるしつらえとし、また客とのコミュニケーションの場となるよう、客の目を楽しませる陳列や軒先のディスプレイを工夫すること。

○街路樹のある通りに面した敷地において敷地際に植栽をする時には、街路樹との関係にも配慮して同じ樹種を採用したり、配植を工夫したりすること。

(店舗の敷地際)
中間領域での飾り付け、店舗の中とのやりとり



街路樹と同種の樹木の配置による、視覚的なつながり形成



印象づける顔の空間

駅前は市外からの来訪者を迎え入れ、まちの印象を印象づける“顔”となる空間です。生駒でも生駒山との関係に配慮したデザインの工夫や、周辺の建築物等と駅舎とのデザインの統一など、印象を高めるための工夫が随所に採り入れられてきました。

多くの人が行き交う空間として、利用者に気持ちよく感じてもらえるようにと地域の住民によって維持・管理された空間も生まれています。こうした取り組みは住民のあたたかい気持ちが形となって現れたもてなしの景観でもあります。



生駒の玄関口である
生駒駅前
再開発街区は一体的な
デザインに



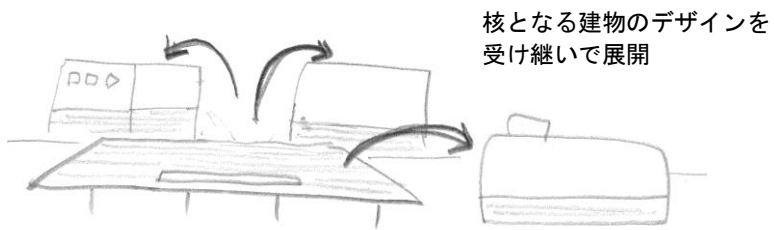
北白庭台
駅舎のデザインと
周辺の建築物の
デザインを協調させて
いる



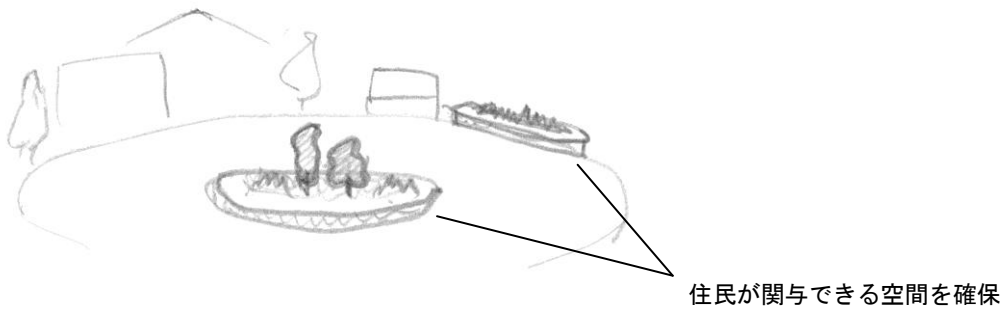
人々を迎え入れるもてなしの空間

* * *

○駅前ではまとまりのある景観を形成するよう、再開発ビルや駅舎など、場所の雰囲気醸し出す核となっている施設のデザインを踏襲、継承するなどデザインに関連性を持たせること。



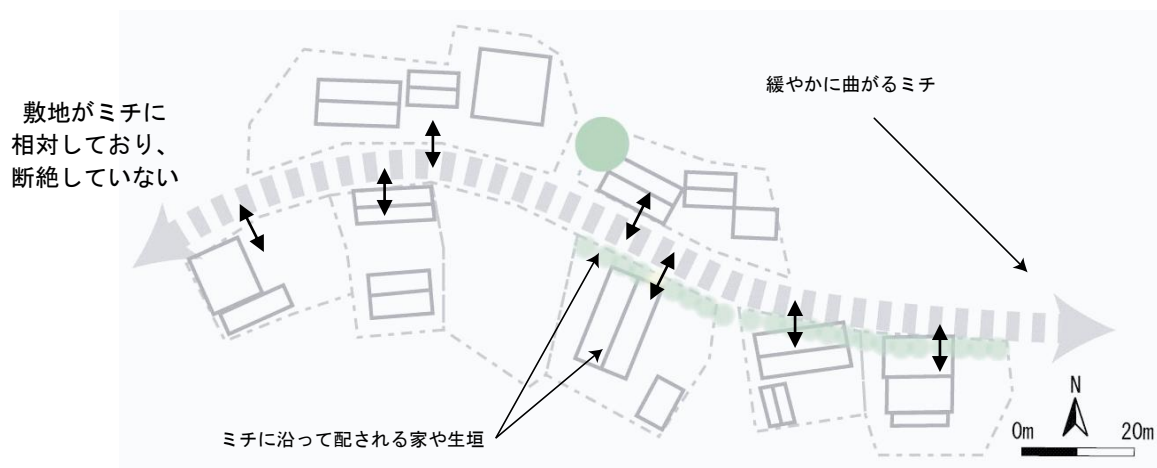
○人々が環境の質を高めることに関われる余地を残しておくこと。住民が管理できる花壇など、関わりが見えるような空間を設け、初めからつくりこみ過ぎないこと。



人の尺度

高低差のある地形が多い生駒では、土地の高低や河川の形状に沿うようにミチが配置され、田畑や家々が立地してきました。そのため高低差を埋める坂道や石積みの擁壁などが日常の空間の中に自然な形で埋め込まれています。人の力の及ぶ範囲で自然と向き合い、自然の摂理に逆らわない暮らしの中から自ずと生まれてきた空間利用のルールは水利や防災の面でも理にかなったものです。

生駒山麓から産出される生駒石は、表面の独特の風合いから庭石や石積みに好んで使われてきました。集落内の民家はもちろんのこと、生駒台や東生駒などの計画的に開発された住宅地内でも多く見ることができます。この背景には現地で調達された材料をうまく使うという合理性もありますが、結果として地域の風土になじんだ景観が生み出されています。



地形に寄り添う集落



ミチに沿って家が配置



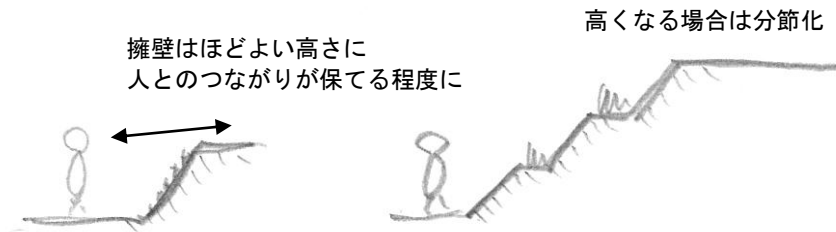
生駒石の石積みと生け垣



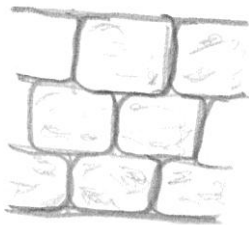
ほどよい高さの石積み

* * *

○擁壁の高さはできるだけ人の背丈を超えないようにすること。高低差が大きいときには小段を設けて分節化したり、直立させず転びを設けること。



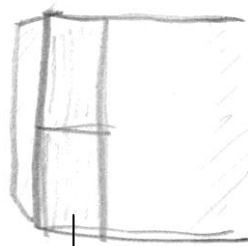
○通りに擁壁が面する場合には石積みとしたり、コンクリートの場合には表面に表情をつけるか緑化するなど手作りの風合いに配慮すること。



○風土に溶け込む地が生み出した材料を積極的に採用すること。生駒石を擁壁の石積みや庭石に用いる他、デザイン要素としての利用を考えたり、植栽には周囲の植生に応じた樹種を用いること。



生駒石を使った石垣



生駒石を薄くスライスし、壁面の材料に

人が交わる場所

古来より集落では地縁に基づく共同体として人々は互いに結束し、ムラを維持してきました。その中で培われてきた集落に固有の習慣や風習で現在も継承されているものも多く見られます。こうした暮らしの中から人々がよく通るところ、使うところ、溜まりやすいところなど、共同生活の中心の役目を果たす場所が自然と生まれてきました。そこには火の見櫓が置かれ、集会所や公民館があり、人々の生活を支え、また交流の核となり、ムラのまとまりを意識させる重要な役目を担ってきました。

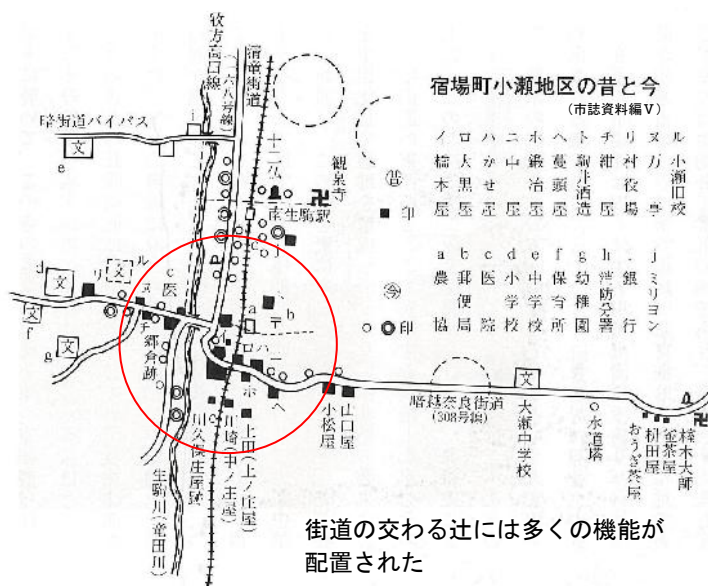
計画的に開発された住宅地においても、こうしたコミュニティのまとまりを生み出す空間の構成が意識されています。公園や集会所、井戸端の交流が生まれるまちかどなど、形は変えながらもコミュニティの中心となる人が交わる空間は継承されています。



集会所や火の見櫓のある中心



コミュニケーションの場でもある水汲み場



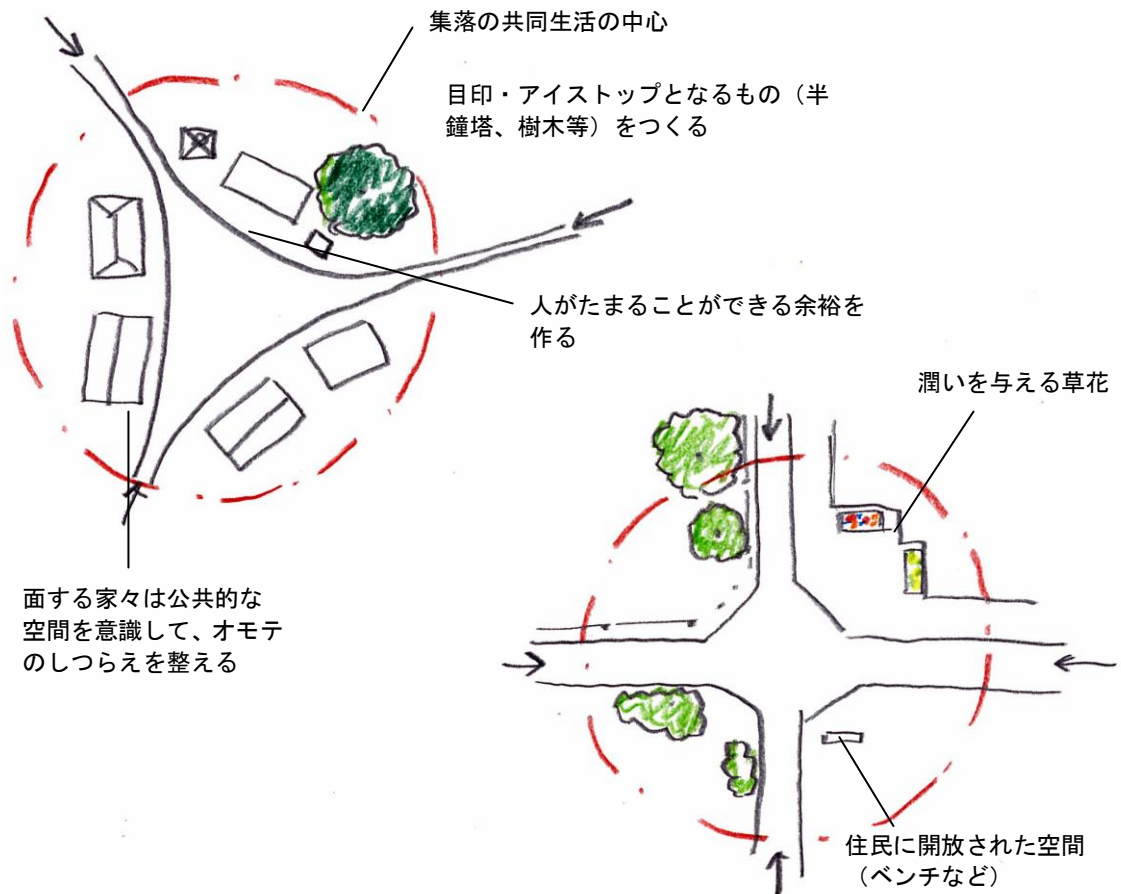
街道の交わる辻には多くの機能が配置された



交通の結節点、住宅地の入り口

* * *

○住宅地の中には生活を支える機能や交流できる機能を配置した共同生活の中心をつくること。そこに立地する建物は人々に開放された機能や空間を提供するよう配慮すること。



聖なる場所の威厳

生駒谷では市街地が拡大し、旧来の集落のまともりも不明瞭になってきています。かつて集落を取り囲むように外縁部に位置していた七つモリは、今も集落の場所を知る手がかりになっています。ムラの人々はこれらのモリを畏れ敬う風習と結びついた聖なる場所として「モリさん」と呼び、大切に守ってきました。集落での生活様式も変化してきましたが、七つモリにまつわる言い伝えは世代を超えて受け継がれ、人々の生活行動や空間利用の中に息づいています。

生駒山から谷筋の低地にかけての空間は、山頂付近の信仰の空間から生活と生業の空間へと場所性が遷移し、山麓付近は両者の境界領域となっています。山麓から低地は住民の生活と生業が展開される世俗の空間、そして信仰の空間との境界領域には多くの寺院が分布し、それらをつなぐ修験道「庄兵エ（しょうべえ）道」が存在するなど修験者の移動空間でもありました。こうした遷移する場所性が聖なる生駒山の威厳を高めているのです。



萩の台のモリ



地藏

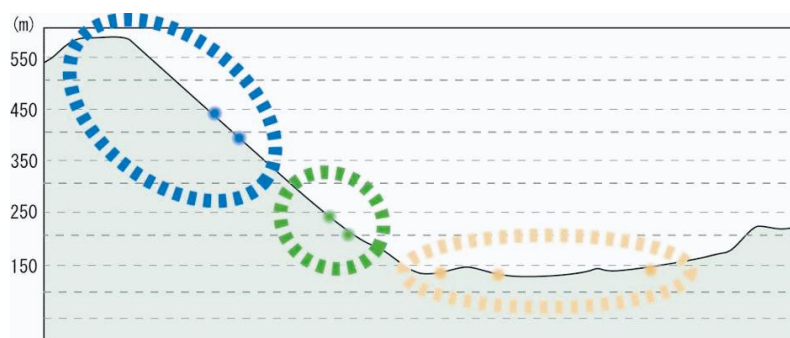


修験の空間

【モリ信仰の言い伝え】

「生駒谷の村々には、昔からそれぞれ固有の七つの森があり、「モリさん」と呼ばれ大切に守り伝えられてきた。モリの木を伐ると激しい祟りを受けると信じられていて、小枝一本折ってもいけない、枯葉一枚持ち帰ってもいけないと厳しく禁じられていた。禁忌を犯したために、恐ろしい祟りを受けたという体験談が、今も生生しく語り伝えられている。」

（『生駒谷の七森信仰』今木義法）



【生駒山の山頂を中心とする空間】

- 生駒山の神聖な空間
- ・ 古来から修験者の修行の場であり、神聖な空間。
- ・ 概ね標高350m以上。

【生駒山の山麓の空間】

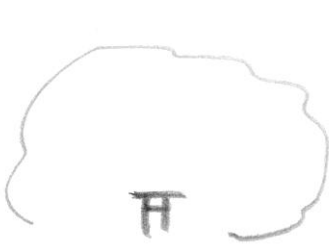
- 生駒山と集落の境界領域
- ・ 生駒山と集落の境界領域に、帯状に寺院が立地している空間。
- ・ 概ね標高150～350m。

【生駒谷の平地の空間】

- 生活と生業の空間
- ・ 河川沿いに農地が拓かれ、集落が形成されてきた空間。
- ・ 概ね標高100～150m。

* * *

○時代を超えて受け継がれ、集落に今も息づくモリや地蔵などのいわれのある空間は大切に守ること。
場所の由来や伝説には素直に耳を傾け、伝承に反した土地の利用をしてはならない。



七つモリ、神社の鎮守の杜を大切に守る



ムラはずれの大木や地蔵さんの物語を継承する

○寺院やモリなどの周囲では生活感が表出しすぎないようにすること。厳かな雰囲気をかもしよう建物の配置やデザインを工夫したり、植栽による見え隠れを意識すること。



植栽等により、生活感が
出過ぎないようにする

見え隠れにより、聖なる場所の威
厳を保つ

移ろいの演出

毎年めぐってくる年中行事や、人生の節目で訪れる儀礼といった伝統行事は、暮らしの中に根付いた文化として受け継がれてきました。また、自治会や商店街で催されるお祭りなども同様に、住民の手によって継承されてきました。これらの特別な時期には見慣れた風景も特別な装いを見せます。それは常に目にする日常の風景に対し、一時的に表れるハレの日の仮設の風景でもあります。

また、ハレの日だけではなく、昼間と夜間、季節、また天候によってもまちの印象は異なります。こうした時のうつろいを考えることが深みのある景観につながります。



どんどこまつり



正月の宝山寺詣



100 円商店街

(注：中、右の写真は差し替え予定)

* * *

○祭りが行われる神社の参道や神輿、だんじりのルートなど、伝統行事の舞台となる場所ではハレの日の演出ができるようあらかじめ考えたデザインとすること。また渡御や花火など、ハレの日の行事を見ることができる場所を確保すること。

○紅葉する樹木や落葉する樹木、実のなる樹木など季節感を感じられる樹木、あるいは花卉の植栽による季節感の演出に配慮すること。

○店舗は夜の装いを考えた夜間照明を工夫すること。

